富永神社祭礼奉納

とき　平成二十二年十月八日(金)
　　午後四時四十五分始
ところ　富永神社能楽殿

能組

5:20分頃

仕舞　老松　榎本奈月
　　小督　榎本美月

仕舞　西王母　川村美幸
　　蝉丸　加藤晃
　　是界　村田昂平
　　竹生島　今泉尚美

狂言　竹生嶋参　太郎冠者　本田蓮汰　主人　田中悠貴
　　後見　大原正巳

仕舞　敦盛　谷野允千帆
　　西行桜　岩崎葉子
　　籠太鼓　鳥居久仁子
　　通盛　本田洋子

小舞　小山伏　酒井淑規
　　岩飛　加藤久和
　　掛川　山口俊一
　　山崎通ひ　佐野泰三

5:40分頃

半能　養老　シテ　長田共永
　　ワキ　太田研司
　　大鼓　清水利高　太鼓　加藤洋輝
　　小鼓　森田牧　笛　今泉英三
　　後見　太田康弘　地謡　桜本泰朗　高林呻二　鈴木崇史　高林白牛口二　杉浦史佳　竹内声位晤　渡辺敏康

6:00分頃

狂言　二人袴　聟　山本勝　舅　水谷至男
　　親　酒井宏　太郎冠者　小沢貞博
　　後見　山口俊一

休憩

一調　駒乃段　高林白牛口二　今岡アイ子

7:50分頃

仕舞

高砂　桜本泰朗

葛城　杉浦史佳

女郎花　今泉英三

狂言

素袍落

太郎冠者　天野雅夫

主人　清川松佐

伯父　大原正巳

後見　佐野泰三

前シテ　清水利高

後シテ　中嶋康夫

能

鵜飼

ワキ　今泉英三

ワキツレ　桜本泰朗

大鼓　河村総一郎

太鼓　鈴木崇史

小鼓　永田聡子

笛　鹿取希世

後見　太田康弘

地謡　渡辺敏康　森田収　長田共永　高林呻二　杉浦史佳　高林白牛口二　太田研司　竹内声位晤

（終了予定八時四十分頃）

主催　本町区

あらすじ

狂言

竹生嶋参（ちくぶじまいり）

主人は太郎冠者の無断外出を咎めるが、竹生嶋参りをしてきたと聞いて許してやり、何か珍しいことはなかったかと尋ねる。冠者は榎にとまっていた雀と鳥が「チチチチ」「コカアコカア」と鳴き交わしていたからあれは親子だなどと話す。さらに変わったことはなかったかと尋ねられて、龍・犬・猿・蛙・くちなわ（蛇）が集まり別れ際にそれぞれ「立つ」「往ぬ」「去る」「帰る」と秀句（駄洒落）を言ったと主人を喜ばせるが、「くちなわは」と聞かれて…。秀句の流行した室町時代の世相の反映であり、言語遊戯を取り扱った初期の狂言の姿を伝えていると考えられる。古くは「ぬらぬら」という曲名だった。

半能

養老（ようろう）

頃は初夏、美濃国（岐阜県）本巣の郡に霊水が湧き出るという報告があったので、雄略天皇の勅命を受けて、勅使が下向します。一行が養老の滝のほとり着くと、老人と若者の二人の樵夫が、来かかります。勅使は、これこそ話に聞く養老の親子であろうと思って尋ねると、果たしてそうでした。老人は、問われるままに、養老の滝と名づけられたいわれを物語ります。ついで老人は、勅使をその滝壷に案内し、霊泉をほめ、更に他の霊水の例を挙げつつ、この薬の水の徳をたたえます。すべてを見聞した勅使は、感涙を流し、この由を奏聞しようと帰洛しかけると、にわかに天から光がさし、花が降り、音楽が聞こえ、ただならぬ様子となります。〈中入〉そこへ、所の者が出て養老の滝のいわれを語り、滝の水を飲んで、若返りの様を見せます。ついで、養老の山神が出現し、清らかな水をたたえ、神仏はもとより同体であり、供に衆生を救おうとの御誓願であって、時として神と現じ仏と現れ給うのであると述べます。そして峰の嵐や谷川の音を音楽として舞を奏し、泰平の世を祝福して、神の国へと帰ってゆきます。今回は半能として中入後の演能を致します。

狂言

二人袴（ふたりばかま）

聟入りの日、恥かしがりやの花聟に頼まれて、舅の家の前まで父親がついて行く。それが太郎冠者の目に止まって中へ呼び入れられることになる。しかし、袴はひとつしかない。その場しのぎのとりつくろいをする二人のあわてぶりを滑稽に描いた狂言。とりあえず、門前で交互にはきかえて急場をしのぐが、二人一緒に出よと言われ、袴をふたつに裂いて、それぞれ前に当てて祝宴の席へ出る。うしろを気にしながらぎこちなく舞を舞うおかしさ。常識も作法も心得ぬ世間知らずの息子と、それをフォローしようとする父親のパターンである。かつては「親子の愛情を中心に曲全体を包むほのぼのとした気分が快い」（狂言辞典）などと評されていた。しかし、過保護に育てた一人息子の大学受験に同行する親が多くなった現代、これを風刺的な視点で鑑賞することも可能であろう。この狂言を取り入れた歌舞伎舞踊の「二人袴」は「ににんばかま」と読む。

狂言

素袍落（すおうおとし）

主人の供で伊勢参宮にでかけることになった太郎冠者が、主人の伯父のもとへ挨拶の使いに行く。太郎冠者は門出の酒をすすめられて上機嫌になり土産の約束をした上、餞別の素袍をもらって帰路につく。迎えに来た主人の小言を聞く耳も持たず悦に入っているうち、うっかり素袍を落とし、主人に拾われてしまう。酒に酔って失敗するおかしさを描いた狂言。酔っ払いの上機嫌ぶりや口の軽さ、言い間違い千鳥足……、典型的な酔態が表現される。その酔い方の演技をはじめとして、素袍をもらった直後のせりふ、あるいは素袍を主人に拾われたあとの演技など、しどころの多い狂言である。なお、素袍は直垂（ひたたれ）の一種で、室町時代には庶民の日常着であったが、江戸時代には礼服となった。

能

鵜飼（うかい）

安房の清澄から出た僧が、鎌倉から甲州の石和川のほとりに着く。宿を貸す者が無く傍の小堂に休む。其処へ松明を照した老翁が現れ、鵜を使ふ身の業の罪深きをなげきながら、同じく堂へ来て休まうとする。伴なる僧はこれを見て思ひ出し二・三年前に鵜使の翁に一夜接待を受けた事があるといふ。老人はその翁は殺生禁断の川筋に鵜を入れた為に捕へられて水に沈められたと語り、実はこの老人こそその鵜使の亡霊であると明かす。回向してやるといはれてそれではと鵜に魚を逐はする有様を見せて去る。僧は川瀬の石を拾つて一石に経文一字を記し、老人の跡を弔つてやる。閻魔王現れ来り鵜飼が殺生の罪は深いが曽て僧を一宿せしめた功徳によつて地獄に堕つる事を免れたと法華経の功徳を様々に説く。